

氏名	YIN XIN (イン シン)
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第56号
学位授与日	2026年3月13日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	ともに制作する書物の実践 —人間・非人間を含む他者との応答をめぐる実験と思弁—
審査委員	主査 武蔵野美術大学 准教授 古賀 稔章 副査 武蔵野美術大学 教授 白井 敬尚 副査 武蔵野美術大学 教授 富井 大裕 副査 武蔵野美術大学 教授 新保 韻香

内容の要旨

本論文は、書物制作という営みを、単なる自己表現や情報の伝達手段としてではなく、人間・非人間を含む多様な他者との「応答」のプロセスとして捉え直し、その実践的・理論的な可能性を探究するものである。

序章および第1章では、書物が歴史的に読書行為や内省的空間を形成してきた物質的側面を確認しつつ、近年の人類学における「記述」から「制作(メイキング)」への転回に着目する。従来、文化人類学は他者を客観的に記述する民族誌的アプローチを主としてきたが、ティム・インゴルドらが提唱する「デザイン人類学」や「デザインを通じた人類学」の潮流は、制作のプロセスそのものを知の生成の場として再評価している。本研究はこの視座に立ち、美術批評家の宮川淳による「鏡の空間」という概念を参照し、書物を固定された「情報の容器」から、動的な「関係性の場」へと解放することを目的とする。

第2章では、制作論の歴史の変遷を検討する。アリストテレス以来の西洋的制作観である「質料形相論」、すなわち能動的な人間が受動的な素材(質料)に形(形相)を押し付けるというモデルを批判的に検証する。これに対し、インゴルドが説く、素材や環境の力に応答しながら形を見出していく制作モデルを提示し、これを本論文の基盤とする。さらに、タイポグラフィの歴史を「理」と「ノイズ」の弁証法的な往還として読み解く。杉浦康平のデザイン実践に見られるように、制作とは秩序による支配ではなく、制御不能な要素といかに共振しうるかという動的なバランスの上に成り立つものであることを明らかにする。

第3章では、「アーティスト・ブック」の系譜を、実験と思弁のための「方法」として再定義する。ウィリアム・モリスからエドワード・ルシェに至る歴史的实践を参照し、書

物がアートとデザイン、あるいは情報の伝達と物質的経験の「中間（あいだ）」にある実践であることを論じる。

第4章および第5章では、筆者自身の制作実践の分析を通じて、「ともに制作する」という構えを具体化する。第4章では、博士課程以前の作品を振り返り、「間主観性」および「中動態」という理論的視座から再解釈を行う。制作の主体は単独の「私」ではなく、鎗や植物といった他者からの触発に巻き込まれながら生成される関係の網の目の中に存在する。第5章では、この「他者」の領域を、現代的な技術環境および根源的な物質世界へと拡張し、以下の三つの実践を通して検証する。第一に、生成AIというアルゴリズムの他者との協働である『隧道噪音 (Tunnel Noise)』である。ここでは、AIがもたらすハルシネーション（幻覚）や予測不能な出力を排除すべきエラーとしてではなく、創造的な「ノイズ」として制作構造に取り込む。人間とAIが相互に模倣と逸脱を繰り返し、その「ズレ」に応答することで、作品が生成される中動的なプロセスを提示する。第二に、機械翻訳という言語的他者との協働である『NO TIME LONG SEE』である。現代の加速社会（NO TIME）において、機械翻訳は透明なコミュニケーションを約束するが、そこには不可避な誤読や文脈の漂白が潜む。本制作では、翻訳のエラーをあえて物質として定着させることで、情報の即時消費に抵抗し、理解のための遅延と滞留（LONG SEE）を作り出す。第三に、死者や土壌という根源的な他者との協働である『天堂来信』である。中国の葬送儀礼における「火（送信）」の概念を反転させ、書物を土中に埋蔵することで「土（受信）」のメディアへと変容させる。微生物による分解や腐敗という非人間的なエージェンシーに書物を委ねることで、不在の死者との触覚的かつ霊的な応答を試みる。

終章において、これらの一連の実践を総括する。本研究が提示する「ともに制作する」という構えは、制作者が一方的に意味を封入する能動でも、環境に支配される受動でもなく、プロセスのただ中に身を置き、他者からの呼びかけに応じ続ける「中動態」的な実践である。

現代社会は、テクノロジーによる加速と効率化の中で、身体性や他者への想像力を喪失しつつある。そのような時代において、書物という物質的な「抵抗の拠点」を構築することは、情報の奔流を堰き止め、我々に「考える時間」「感じる時間」を取り戻させる批評的な意義を持つ。書物は完成された「名詞」ではなく、読み手や環境との関係の中で生成し続ける「動詞」として、終わりなき応答の旅路の中に開かれているのである。

審査結果の要旨

本論文は、書物という形式による制作行為を、人間だけでなく非人間をも含む多様な他者との「応答」という関係性の探究のプロセスとして捉え、その独自の視点から歴史的・理論的系譜と制作主体の中動的な実践について論じたものである。

本論文では、まず序章において、書物の物質性と読書行為における身体性や感覚的経験との不可分の関係を前提として、美術批評家の宮川淳による「鏡の空間」という概念が参照され、書物の作者と読者、その制作実践と読書行為における思弁とのあいだの間主観的で中間的な関係に焦点を当てる。また「他者」を単に協働者としての人間だけでなく、素材、環境、偶発的現象、生成 AI などの装置も含むものとして広く定義づける。

その上で第一章および第二章では、デザインと人類学とが相互に補完し合う領域横断的な先行研究を取り上げ、民族誌の表象の限界から近年のデザイン人類学やアクターネットワーク理論へと至る研究動向までの確に整理しながら、デザインをプロセスとして捉える思考の転換について論証する。特にその理論的基盤として人類学者ティム・インゴルドの提唱する「応答」という概念を導入し、デザイナーを人間及び非人間を含む他者や環境との動的なプロセスに介在的に参与し、他者と相互に応答し合い、ともに制作する存在として位置づける。そしてこのデザイナーの態度を書物の制作実践へと導入するための前提として、近代以前の書物の歴史的系譜を辿り、冊子本の余白の注釈、中世写本の制作過程、活版印刷術以後のルネサンス期の芸術家たちによる書物を通じた知的探求を読み解き、それらをプロセスへの介在や、ともに制作する態度や、書物を実験と思弁の場として用いた先行事例として捉え直す。さらに、デザイナーの杉浦康平のエディトリアルデザインの実践を詳細かつ具体的に分析することで、理とノイズが対立しつつ共振する弁証法的なプロセスとして再解釈し、本研究をデザイン史の文脈にも接続する。続く第三章では、特に20世紀以降の日本および欧米圏のアーティスト・ブックの歴史的発展を概観したうえで、アーティストブックの実践を、書物／アート／デザインの諸ジャンルの中間、情報伝達の媒体と物質的経験の中間にある実践として捉え、人類学的な他者との遭遇とデザイン的な介在を同時に実践できる実験と思弁のための方法として再定義する。本論文における書物制作のプロセスを歴史的な文脈へと位置づけた丁寧な論証は、従来の研究では人類学、デザイン史、書物史などの分野で個別に論じられてきた問題を領域横断的に接続する多角的視点を持つものとして評価される。

こうした理論的基盤に立ち、第四章および第五章では、自身の制作実践の分析を通じて「ともに制作する」という態度を具体的に示している。第四章では、改めて宮川の「引用」や「鏡」や、インゴルドの「応答」や「ウェイファリング」などの概念を参照したうえで、間主観性や中動態などの主観と客観を越えた視座に立ち、作家と読者の間の中間的な実践として書物の制作プロセスを論じている。具体的なケーススタディとして、自身の制作物（《Cosmic Dropping》、《GREAT GRATE》、《森》《RUST BOOK》等）の変遷が分析され、書物制作という実践的行為が、人間のみならず、動物、植物、人工物などの非人間的なエージェントとの共創を含む他者との応答のプロセスとして記述される。第五章ではさらなる発展として博士課程での制作物——人間及び生成 AI という非人間的でアルゴリズム的な他者との応答的な制作を試みた《隧道噪音》、機械翻訳という言語的な他者との協働によって誤読や摩擦を可視化し、情報の即時消費に抵抗する《NO TIME LONG SEE》、土壌に

おける腐敗プロセスや不在の死者という根源的な他者との協働に焦点を当てる《天堂来信》——の具体的な実践が詳細に分析される。

これらの一連の理論的考察と制作実践の往還を通じて、本論文において書物を「ともに制作する」という態度は、作者・読者・非人間的他者との関係のネットワークや、それらを具現化する生産過程における素材や印刷技法などの物質的な抵抗の中に身を置いた動的な応答のプロセスであることが実証される。この書物制作の終わりのない開かれた生成のプロセスが、加速するテクノロジーによって身体性が希薄化した現代社会において、物質的な抵抗の拠点を構築するための批評的意義を持つ実践として結論づけられる。

本論文審査では、博士課程における制作物を展示した審査展会場において公聴会が開催され、1時間ほどのプレゼンテーションと、活発な質疑応答が行われた後、博士論文審査委員会による口述試験が行われた。各審査委員からは、身体性や物質性を欠いたデジタル技術の拡がる社会において、いかに物質として残すのか、なぜ書物をつくるのかを問い直すことが本研究の核心をなすと評価され、その問いは今後の研究において持続的に取り組むべき課題として指摘された。また作品や展示の経験とは別に、書物という形式により経験や記録を残してきたアーティストブックの実践を対象に、作者とデザイナーや写真家などの他者との協働の実態をフィールドワーク調査等によって明らかにすることで、今後さらに本研究を深化させていくことへの期待が述べられた。加えて、本研究を通じて、武蔵野美術大学美術館図書館の杉浦康平デザインアーカイブを活用した美術・デザイン研究のあり方を示している点も高く評価された。最終的に協議の結果、本論文は博士論文としてふさわしい水準に達しており、全員によって合格と判断された。

<目次>

序章

1. 書物をめぐる問い
2. 応答する制作へ——人類学との出会い
3. ともに制作する書物の探究——研究目的と本論文の構成

第一章 デザイン人類学——起源・系譜・概況

1. 科学とアートの合流に——〈中間的な〉学問としての人類学
2. デザイン人類学の台頭と展開
3. デザイン人類学の系譜

第二章 介入するプロセスにある本づくり

1. プロセスとしてのデザイン——質料形相論から応答へ
2. デザインと人類学の絡まり——記述・解釈・説明から介入へ、そして共創へ

3. 流動し続ける書物
4. なぜ本づくりなのか？——〈実験〉と〈思弁〉の場としての書物
5. 理とノイズの中間

第三章 方法としてのアーティスト・ブック

1. アーティスト・ブックの発展の歴史——「実験と思弁のプロセス」を手がかりに
2. 固定概念の罫から脱出、流動へ——〈中間的な〉空間としてのアーティスト・ブック
3. 〈中間的な〉モノの応答——人類学とアーティスト・ブックの共振

第四章 自作分析——「幕間」から「間主観性」・「中動態」へ

1. 間主観性と中動態
 - 1.1 間主観性——主客を越えた「あいだ」の視座
 - 1.2 中動態——能動と受動を超える行為の構造
2. 視線の揺らぎと応答の兆し——制作実践における観念の変容
 - 2.1 『Cosmic Dropping』——主観性の地平に立つ「見ること」
 - 2.2 『GREAT GRATE』——歪みを受け入れる視線
 - 2.3 森の囁きを写し取る——自然との「あいだ」に開かれた書物
 - 2.4 『RUST BOOK』——記録、変容、そして共在の書物
3. まとめ

第五章 博士課程での制作をめぐる

1. 制作の射程——非人間的共作者の拡張
2. 『隧道噪音』
 - 2.1 非人間的共作者としてのAI——技術との応答に向けて
 - 2.1.1 素材、環境、そして技術へ——非人間的存在の連続体としてのAI
 - 2.1.2 AIとの協働——模倣と逸脱のメカニズム
 - 2.1.3 中動態的技術論——倫理と配置の再構成
 - 2.2 関係性のメタファーとしての「線」と『野停』
 - 2.3 協働のメカニズム——模倣と逸脱の循環
 - 2.4 実在しない評論家による評論文
 - 2.5 『隧道噪音』の定着
 - 2.5.1 本制作の装幀について
 - 2.5.2 用紙と印刷手法の選定——素材との対話と矛盾の活用
 - 2.5.3 評論集の編成
 - 2.5.4 応答と生成の連鎖としての書物
3. 『NO TIME LONG SEE』
 - 3.1 書名『NO TIME LONG SEE』について

- 3.2 理解の不透明性と「翻訳地帯」としての日本
 - 3.3 翻訳のブラックボックスと循環する誤読
 - 3.4 覇権言語としての英語
 - 3.5 物質的抵抗としての書物
 - 3.6 技術的メディアにおける不透明性の復権と新たな「見る」こと
-
- 4. 天国からの手紙——不在の他者との物質的応答
 - 4.1 物質の先行と時間の逆転——反・質料形相論的实践
 - 4.2 儀礼の転用——「火の送信」から「土の受信」へ
 - 4.3 埋蔵——非人間的エージェンシーとの協働
 - 4.4 非言語的テキストの可読性——痕跡を読む
 - 4.5 共在の場としての書物

終章

- 1. 制作の旅路——論の回帰と螺旋
- 2. 制作の倫理と「中動態」的転回——理とノイズの共振
- 3. 「遅さ」と「物質」の復権——加速する社会への抵抗として
- 4. 閉じられない書物、終わりなき応答

参考文献リスト

図の出典